

大阪市大『創造都市研究』第1巻創刊号 2006年3月

113頁～130頁

■ 査読論文 ■

## 対人関係能力に重点をおいた社会復帰プログラム実践 ～更生施設におけるSSTから見てきたもの～

藤木美奈子（大阪市立大学大学院・創造都市研究科・博士(後期)課程）

Practice of a Social Re-entry Program Focused on the Ability for Personal Relations:  
Some Findings Drawn from the Social Skills Training in a Social Rehabilitation  
Center

Minako FUJIKI (Doctoral Course for Creative Cities, Graduate School for Creative Cities,  
Osaka City University)

### 【目次】

はじめに

I. 社会復帰支援としてのSST

II. 入所者の課題とその克服

III. 更生施設入所者の社会復帰

おわりに

### 【要約】

本稿は、2期のSST（Social Skills Training 社会生活技能訓練）実践の過程で収集した質的データを分析することにより、更生施設入所者のかかえる問題の内容と課題について明らかにしようとするものである。

入所者は総じてADL（Activities of Daily Living 日常生活動作）は身につけているものの、仕事や地域生活、対人的な相互作用に必要なスキルが欠如している。また、社会的スキルに対する知識はあっても、それを実行する行動能力とフィードバック機能が欠如していると考えられる。その仮定のうえで、なぜそうしたことが起きるのか、事例から考察してみた。

入所者は面接などの場面において、過剰に話し過ぎたり、動揺や緊張から質問にうまく答えられないことから、なかなか仕事に就くことができずいたり、ギャンブル仲間からの誘いや、借金の依頼に対して拒否できなかったりと、さまざまな場面でうまく対応できない。そのために、社会復帰が困難になっている人が多い。

これらの理由としては、過去におけるさまざまな体験により、未解決な心理的問題を多くかかえているため、もともと持つ能力や知識を生かせなかったり、積極性や自己効力感を持たず、さまざまな場面で不自然な応答をしてしまうからではないかと思われた。

そこでSSTで、問題の共有や分析、整理をしたり、つまづきやすい場面をあらかじめ想定してロールプレイによる練習を繰り返すことによって、心理的動揺をコントロールし、適切な対応ができるようになることを目指した。

一方、入所者は遊興型と孤立型のタイプに分かれるが、遊興型は自らのこれまでの生活習慣や文化といった過去に愛着があり、学習などの新しい挑戦に消極的な面が強いため、総じて孤立型のほうが、自己変革への願望が強く、社会復帰しやすいことについて言及した。

以上のことから、更生施設におけるSSTは、過去の自分との清算を含めた対人関係能力の獲得に重点をおいたプログラムであることが求められるとともに、社会復帰の意欲を増進する役割が重要だと考えられる。

## 【キーワード】

社会復帰、SST、社会的スキル、更生施設、野宿生活者

## 【Abstract】

This paper discusses practices of a social re-entry program for boarders in a social rehabilitation center in order to solve the problems with them, based on a case study of two consecutive Social Skills Training (SST) courses. Although the boarders mostly possess ADL (Activities of Daily Living), they are lacking in skills for work community life, and personal interactions. The assumption of this study is that they seem to have knowledge about social skills, and that they lack in application and feedback abilities.

Boarders have difficulty in coping with situations like job interviews where they get too sensitive to answer appropriately, temptations from their fellow gamblers, requests of money loan from their friends.

The reason why social re-entry is hard to most boarders is that they are unable to make use of their abilities and knowledges, possess self efficacy, response naturally in interactive situations due to a variety of unsolved psychological problems caused by their past.

SST was introduced and boarders were expected to share, analyze, and clarify their problems. They also role-played the stumbling situations they might encounter. The SST sessions were designed to help the participants control their psychological unrest and cope with difficult situations appropriately.

Boarders can be classified into two types: pleasure-seekers and isolationists. Pleasure seekers are referred to be attached to their past habits and culture, and are reluctant to make a new challenge like learning, whereas isolationists are better motivated to self improvement and also social re-entry.

The paper finally concludes that the SST program in a social rehabilitation center are required to focus on the acquisition of ability for personal relations accompanied by dealing with the past. It is also expected to facilitate their willingness to social comeback.

## 【Keywords】

Social Re-entry, Social Skills Training, Social Skills, Rehabilitation Center, Homeless

## はじめに

人生の中途において、何らかの要因により心理的なダメージを受け、家族や職場、近隣の人間関係を取り結ぶことができなくなる、あるいは収入・支出のバランスを著しく欠いたり、弁済能力を超えた借金をするなどして社会生活が営めなくなる状態へと転落すること——これを筆者は「社会的遭難」ととらえ、その当事者を「社会的遭難者」と呼んだ<sup>1)</sup>。こうした概念で包括的に対象化することによって、さまざまな問題群に対して汎用性の高い社会復帰支援を構想することができるのではないかと考えたためである。

個人が社会的に遭難する要因には、失業やフリーターなどの就労問題、借金などの経済問題、家庭をめぐる問題、依存や嗜癖の問題、暴力、犯罪・非行などの社会的逸脱の問題、さまざまなストレス問題などが考えられ、それらにより野宿生活にまで至ることもある。

更生施設は、こうした問題を多重的にかかえる人々が社会復帰をめざして生活するところだ。一般的に社会復帰とは、受刑者や精神障害者といった隔離された施設の中で暮らす人々の課題として語られることが多いが、更生施設の場合、入所者が自らの意志によって施設外で社会生活を営むことが目標となる。

しかし、大半の更生施設において、彼らの社会復帰に向けた取り組みは依然として手つかずか、試行錯誤の段階にある。筆者は、その理由のひとつに、入所者に対する誤解や偏見などの認識不足、すなわち彼らがどのような思考傾向や経歴の持ち主であり、今なぜここにいるのかがよく解明されていないことがあるのではないかと考えた。そこで、その解明の一助とするためにアセスメントを実施した（藤木 [2005b]）。

対象は、後述するプログラムへの参加を希望した入所者である。アセスメント方法は、面接法を採用した。面接法では、その入所者が経過してきた別施設において採取された入所者面接記録、心理学的検査診断票（WAIS-R、YG性格検査など）を基礎データとし、ひとり30分から50分の聞き取りを行った<sup>注2)</sup>。

面接の結果、入所者の多くが生育歴、あるいは成人後の生活における何らかのつまずきにより、対人関係に問題をかかえており、そのため安定的な仕事に就くことができず、精神的にも経済的にも自力で社会生活が営めなくなっていることがわかった。そこで、社会復帰の手立てのひとつとして、更生施設P<sup>注3)</sup>においてこれまで2期にわたりSST（Social Skills Training 社会生活技能訓練）<sup>注4)</sup>を実施してきた。本稿は、その過程で収集した質的データを分析することにより、更生施設入所者のかかえる問題の内容と彼らの課題について明らかにしようとするものだ。

## I. 社会復帰支援としてのSST

### 1. SST導入の理由

本稿で扱う研究の方法は、施設Pにおいて、筆者が職員の協力を得て実施したSSTの2期にわたる実践の記録に基づき、ロールプレイなどにおける参加者のナラティブに注目して分析を行った。

SSTとは、自分の気持ちや要求を相手に上手く伝えられない、相手の言うことに上手く応じられないなどの、対人的な問題行動や心理社会的問題を抱えている人達を対象に、適切で効果的な社会的スキル<sup>注5)</sup>を体系的に教えようとするものだ。認知行動療法がベースになっており、個人の経歴の中で学びそこなった適切な社会的スキルは、教育により再学習しようという考え方が前提になっている。

SSTは、各種の治療技法を組み合わせたトレーニング・パッケージとして、欧米では1970年代以降、広範囲に発展してきたため（相川 [2000]）、その目的も、引っ込み思案の人には主張行動をトレーニングしたり、犯罪者には攻撃行動を抑制するなど、具体的な点においてはさまざまなバリエーションを持つ。ただし、大きな目的が「社会的行動の変容」にあることは共通しており、具体的に用いられている技法についてもほぼ共通している。

最近では自分自身や状況をどのようにとらえているかといったことや、さまざまな解決のための方略を考え出す能力、さらには、その結果どのような事態になるかを予測する能力など、認知的側面の訓練が注目されるようになってきており、SSTとはそうした能力の訓練を含むものとして考えられている（渡辺 [1996]）。

更生施設におけるSSTの実施はほとんど知られていないが、これを採用した理由は、ラッドとマイズ [1983] <sup>注6)</sup>の「スキルの欠如仮説」が示唆するように、人が適切な行動をすることができないのは、特定のパーソナリティ特性や知的水準などの問題というよりも、実行するために必要なスキルが欠如しているから、という見方が更生施設入所者にあてはまると考えたからである。

臨床分野におけるSSTは、障害児、うつ病、統合失調症患者の行動特徴、非行少年、社会性のない子ども、孤立した子ども、引っ込み思案の子ども、拒否されたり無視されている子ども、攻撃性、衝動性の高い子どもたちに適用されている（渡辺 [1996]）。これらの対象者が持つ行動レパトリーは、前述のアセスメント結果から浮かび上がった更生施設入所者に共通する特徴、すなわち多くの転職歴や犯罪歴、依存症などの間

題と重なる。

また、SSTは集団で行える訓練プログラムであり、「こころ」という抽象的な対象を扱う自己探索より、就労や地域生活を念頭に対人スキルの向上をめざした教育的関わりの方が入所者には受け入れられやすい。こうした理由から、更生施設入所者の社会復帰の手立てのひとつとして、社会的スキルを補うことが有効であると考え、プログラムの基礎理論としてSSTを導入した。

## 2. プログラム作成のプロセス

プログラム作成にあたっては、まず、日常的に入所者と接している職員の考えを取り入れることが不可欠と考え、2004年5月より約半年間、職員Sさん（ソーシャルワーカー、勤務5年目）と話し合いを重ねた。そこで挙げてきた入所者のおもな問題点は次のようなものだった。

- ・病院のかかり方がわからない。医師のいう通りにするだけで、自分の病気について知ろうとしない。薬をもらってそれで安心する。また、病院で非常に遠慮する。
- ・食堂などで、次の人のために何かをするなどのエチケットやマナーに欠ける人が多い。
- ・人のことをほめるのが苦手。すぐ自分の権利を守ろうとする。
- ・社会性のなさから、人の立場に立って考えることや人を励ましたりすることが苦手。
- ・あらゆるものに鈍化し、それを意識化できず、一部、特性にしまっている。
- ・意志薄弱、継続が苦手。禁酒など最初の志はどこへ？
- ・入所への認識が薄い。保護してくれるのが当たり前で、自立意欲がそがれやすい。
- ・野宿の経験がある場合には、それを知られずに伏せたまま面接を受けたい。もしくは開示する場合うまく説明できない。
- ・職場における人間関係で、誘われた時などにうまく断れない。
- ・金銭の貸し借りに、お金を渡さずに切り抜けることができない。

これらを整理すると、入所者には対人関係への不慣れと怖れがあること、他者に関心・配慮が持てないこと、何事にも感情を鈍化させたり、自己防衛心も強いといえる。また、依存心が強く、自尊感情が低く、これまでの挫折の繰り返しによるあきらめ・失望、失敗の繰り返しによる自信喪失のためか、積極性も乏しい。権力や権威への怖れも強く、自我の未成熟・自他の境界があいまいであるためか、人にきっぱりとした態度をとれない、などとなる。

こうした意欲の欠如や消極性も社会的スキルの欠如ととらえると、入所者に必要な学習課題は次のように集約できる。

- ・自己肯定感の回復
- ・自己探索・自己分析の基礎的学習
- ・グループ学習などによる社会への帰属感の回復
- ・基礎的なコミュニケーション理論学習
- ・ポジティブ、アサーティブ学習
- ・目標設定と達成感の経験

これらの点をふまえて構成し、施設Pで2期実施したのが、次のプログラム（10回）である。

1. 自分をどう伝えるか①（多様なコミュニケーション基本）
2. 感情とどう向き合うか（思いこみ 考え方を変えてみる）

3. 自分をどう伝えるか②（医療現場 上手な情報の授受）
4. 面接練習（「施設」をどう説明するか 信頼をつくる）
5. 報告・連絡・相談（上手な相談とは アサーティブな表現）
6. 自己コントロール①（金品にまつわるトラブルを回避する）
7. 自己コントロール②（酒・ギャンブル嗜癖を考える）
8. 辞めなくなったら（同僚の相談を受ける 続けるために）
9. 関係をつなぐ（親しい人にひさしぶりに電話をする）
10. 対話練習（自己開示 うなずき 会話のキャッチボール）

先に述べた入所者の問題点の克服を目標に、社会的スキルのとらえ方に加えて、感情のコントロールや信頼・自己開示、嗜癖などの認知的側面、そこへ彼らにとって重要度が高いと思われる就労に関連したテーマを加えた。

具体的には、10人くらいのグループで毎回1時間程度の集まり（セッション）を持ち、その日のテーマに沿った実際の場面を設定して、適切な対応方法をロールプレイなどで学び、それに対するコメントをリーダーや参加者が相互に行いながら社会的スキルを学ぶ。テーマによって若干変更があるが、基本的な流れは次のとおりである。

1. アイスブレイキング（円形に座り、ワークの前に雑談をして緊張を緩和する）
2. アファメーション（誓いの10カ条を全員で唱和する）
3. テーマの確認と説明（言語的教示）
4. テーマをめぐる体験や考えを出す（各自自由に発言、意見を出し合う）
5. ロールプレイ（行動リハーサル）
6. フィードバック（それぞれのロールプレイについて褒めあい、感想を述べ合う）

アイスブレイキングは通常、リラックスのために行うが、参加者たちはこうした場に不慣れであり、かえって緊張する人も少なくない。しかし、発語や雑談に慣れる必要があり、できるだけ何か話してもらうことにしている。アファメーション<sup>167)</sup>は参加の目的やルール、心構えなどを確認するためのもので、一般的にSSTを行う際、開始前に確認される「約束ごと」<sup>168)</sup>の内容を取り入れ、この施設向けに構成した。テーマの確認と説明のところでは、その日のテーマについて10分ほど説明するとともに、社会的スキルについての知識をつける。ロールプレイは、2人1組となって、それぞれ1組ずつ順に、皆の見ている前で与えられた役割で課題練習をする。

次に、その中で見えてきた入所者の特性、傾向、課題を述べる。

## Ⅱ. 入所者の課題とその克服

更生施設入所者に社会的スキルが欠如しているというのはいかなる意味においてなのか。ひと言で社会的スキルの欠如といっても、その実際は一樣ではない。ペーマン（Wehman [1975]）は、精神遅滞者を対象としたカリキュラムにおいて対人行動スキルを4つに分けた。

- レベル1：基本的な生活水準の確立に必要なスキル（用便、着替え、食事）
- レベル2：基本的な相互作用に必要なスキル（視線を交わす、姿勢をよくする）
- レベル3：仕事や地域で生活するために必要なスキル
- レベル4：対人的な相互作用に必要なスキル

この区分を援用すれば、更生施設入所者はADL (Activities of Daily Living 日常生活動作)<sup>※9)</sup>が自立していることが入所の最低条件であるため、レベル1の社会的スキルについては入所者全員がほぼできていると考えられる。レベル2についてはできていない人も目につくが、これはプログラムでというよりも指摘を受けて日常生活の中で改善すべき項目であるため、プログラムはレベル3と4を中心に構成することになる。

一方、マッドとライズはSSTの目的を「社会的行動についての適切な概念を習得するように援助すること」であるとし、スキルの欠如を以下の3つに区別して考えている。

1. 適切な社会的行動の知識が欠如していること
2. スキルについての知識はあるが、スキルを実行する行動能力に欠ける
3. フィードバック機能が欠如している

1は、社会的相互作用するための適切な知識を持っていないことを指す。たとえば、他人とゲームをする目的を「他人と楽しむ」のではなく、「他人と競争して勝つ」ことに置くことで、仲間から受容されない結果を招く、などである。2は知識と行動にズレがある場合である。この場合、知識が行動にうまく結びつくような筋道を考えることが必要である。3は、自分の行動およびそれが他人に与える影響を評価する能力や、観察したり、ある基準と比較したり、特定の行動に関心を向ける能力が不足していることを指す。また、努力のしかたや適応するための術、事態の結果(成功や失敗)に関する推測、さらに原因が何であるかを考える能力が欠如していることとされている。

更生施設入所者の場合、1、2、3いずれにも該当する人もいるが、これまでのSSTにおける観察からいえば、2、3に該当する人のほうが多いように思われるため、プログラムもこうした点の克服を目的として進められる(1のみ該当するケースは考えにくい)。

では、更生施設入所者に、頭ではわかっているけれども行動が伴わない人、自分の行動を省みることができない人が多いのはなぜなのか、SSTの実践に即して考えてみたい。

### 1. 状況に適した答え方をする

更生施設から出所し、地域社会で生活するためには、生活資金を確保するための就労先が必要となる。そこでの関門が「面接」である。一般的に、あまり答えたくないことを人に聞かれた場合、どう答えるかは悩ましいものだが、入所者の場合その悩みはさらに大きい。

次の会話は、SSTにおけるロールプレイの一部である。参加者同士で面接者Qと求職者Aの役割をそれぞれ受け持ち、模擬面接をしている。

- ① Q おいくつですか。  
 A 49歳です。  
 Q 49歳ですか。これまでどのようなお仕事されてきましたか？  
 A スナックです。  
 Q スナック？  
 A …キャバクラです。あとは青果の工場で。  
 Q 今はどちらにお住まいですか？  
 A 施設Pです。  
 Q と、言いますと？  
 A うまく言えないんですが。  
 Q と、言いますと？

- A ……。
- Q 前のお仕事を辞められてからどれくらい？
- A その前は…。
- Q 就労のブランクは？
- A 日雇い…いや、アルバイトみたいな感じ。

(2005年06月28日 R 2-4 面接のロールプレイ)

①では、何でもまともに答えている反面、ほとんど説明することのできない事柄もあり、面接者には不安要素が大きく残る結果となっている。事前の準備なしに、咄嗟の判断で多様な職歴を無難に表現することは難しい。次は、そうした点についてリーダーからの助言や注意を受けたあとにやり直したロールプレイである。

- ② Q 今日どちらからこられました？
- A 北区のほうからです。
- Q 以前、どんな仕事してたんですか？
- A 飲食関係です。

(2005年06月28日 R 2-4 面接のロールプレイ)

- ③ Q 以前は何の仕事してました？
- A 建築関係です。
- Q お住まいは？
- A Pアパートです。

(2005年06月28日 R 2-4 面接のロールプレイ)

まず②は、「どちらから」という質問に対して、「北区のほうから」と、「ほう」という曖昧な表現を使うことによって施設Pという明言を避けている。同じく、「どんな仕事」という質問に、「飲食関係」と「関係」を使うことで、具体的な説明は避けている。実際は、飲食関係とはアルバイトサロンのフロア係であった。③でも、「建築関係」という表現を使い、施設Pを、「アパート」と言い換えている。前職の建築関係とはトビ職であった。

最近では日雇い労働の未経験者も増えているものの、この施設が本来対象とする日雇い労働経験を持つ人は依然として存在する。彼らが年齢や体力的にきつくなったという理由から日雇い以外の仕事に就くことを切望しても、職業形態から人と話すのが苦手な傾向が強く、適切な回答や説明ができにくい。また、一般的に家族持ちが歓迎される傾向があるが、入所者はほとんどが現在単身者であり（藤木 [2005b]）、この点でも不利に働くことが多い。

このような関門を切り抜けて彼らが無事採用に至ることは相当に難関である。そのため、あらかじめ想定できる場面の練習を行い、少しでも面接のリスクを下げることが求められる。そうした点から、プログラムの4回目に、「面接練習（「施設」をどう説明するか 信頼をつくる）」を設定しているが、ここでの力点はいわゆる一般的な面接練習とは異なり、知られたくない経歴を自らがどうとらえ、どこまで、どう話すかということに置かれる。

一般的に、野宿生活者や施設入所者などさまざまな背景を持つ人に対しては強い偏見があり、持続性や安定性、人格的な問題などを理由に採用にいたらないと判断されがちである。前出のロールプレイに見るように、彼らが答えにくい質問として、「現在の住まい」「前職」「家族について」などがあるが、それらはいず

れも彼らの心理的抵抗を呼び起こす。そのため、面接時に過剰にしゃべってしまったり、逆に口ごもってしまう。それは、自らがたどってきた数多くの変遷、紆余曲折に対するうしろめたさによるものであろう。

だが、そうした場面も、あらかじめ想定練習をしておくことで、落ち着いて面接に臨むことができる。面接者によってはさらに突っ込んだ質問をしてくるかもしれないが、希望職種や面接者、労働条件によっては、こうした簡単な受け答えで済んでしまう場合は少なくない。

また、入所者はこれまでの挫折や失敗の積み重ねから、発想が全般的にネガティブで、自己効力感を持っていない者が多い。そのため、面接において自分の短所は答えられても、長所については答えにくい。「うまく行かなかったこともあるが自分なりに努力をつづけている、チャンスがほしい」など、日々の練習で自己を肯定する言葉を多用しておくことが必要である。

一方、入所者は、面接者の心情や役割、目的や視点を理解できず、物事を一面的にとらえてしまいがちである。そのため、面接直前のプレッシャーに負けて当日会場へ足を運べなかったり、ささいなことでイラ立ち、キレてモメごとを起こして帰ってってしまうなどのトラブルを起すことがある。そこで、ロールプレイでは面接者役も体験する。これにより採用側の心情を理解し、面接者がどこに注目し、何に配慮して採用を決めているかを推し量ることができ、実際の面接に生かすことができる。

この他、面接以外の場面において自分に関する質問を受けた場合は、状況によって答え方を選択できることを知っておくことも重要である。問われた場が面接であるのか、職場の同僚との休憩中に行う雑談なのか、近隣との単なるあいさつの会話なのかによって臨機応変に答え方を変えてよいのだと知ることで、気持ちが楽になり、人との交流・接触を避けずに済むのである。

## 2. 借金を断る

入所者たちにとっての最大の難関は金銭、とりわけ借金をめぐる問題である。彼らがひきずってきた人間関係では、いわゆる義理や人情、かつて世話になったという「しがらみ」が重視され、相手の依頼や申し出にさからうことはご法度なのだという考えが根強い。借金を断る練習においてそれは顕著に現れる。

### (1) 断れない自分の確認

次は、借金をテーマにして、申し入れられた借金を断るというロールプレイである。借金を申し入れる人をR、断る人をDとした。

- ④ R あ、急にちょっと入用が。もしよかったら、1万円貸してもらえるかな。  
 D なるほどね。わかるんだけどね。いつごろまでに返してもらえるかな。  
 R 今度給料日までに返します。  
 D わかるんだけど、僕も次の給料日までを考えるとちょっとね。お互い給料日って同じ日なの  
 ね。もし、1万円でなくてもいいんだったらね、明日にでもお貸しさせてもらいます。  
 R はい、わかりました。

(2004年12月14日 R2-5 生活 上手にことわる)

結局、Dは減額して貸すと相手に伝えており、頼みを断ることはできなかった。

ジェンダーの問題ということもできるだろうが、参加者の多くは「金というものはごちゃごちゃいわずにサッサと出すことが美德であり、男らしいことだ」という考え方を持っており、案外これが毅然とした態度をとれない大きな理由になっているようだ。

- ⑤ R 昨日、給料もらったばかりなんだけど、全部ギャンブルですってしまって、あと1万くらいしかないんだよね。5万くらい貸してもらえんかな。お金貯めてるみたいだし。月賦で返そうと

思ってるのよ、月に1万ずつくらい。利子つけてね。

D 僕は利子は関係ありません。貸すのは貸します。でもね、僕今、5万円しか持ってないの。僕も生活あるから、3万円なら貸します。同じ会社で働いている人同士やから、利子は要りません。3万円はどうですか。あとのお金で僕もやっていくようにします。

R いつですか。

D 今日です。今日貸します。

R 月賦でいいですか。3回で。

D ええ、いいです。できた時点でいいですから。利子とか関係ありませんので。できた時に返してください（お金を渡す動作をする）。

(2004年12月14日 R 2-5 生活 上手にことわる)

参加者のうち、ロールプレイにおいて相手の頼みをきっぱりと断ることができる人は極めてまれであった。はじめから金を貸すのは「しかたないこと」と考えており、断れないという思い込みがもともとあるせいか、歯切れが悪く、苦笑いとともにしきりに首をかしげ、しばし黙り込んでしまうことが多く見られた。また、数千円の額であれば与えたものと考え、という発言が中心を占めた。

このように、彼らは概して借金に対して寛容である。このロールプレイにおいても、ギャンブルで使い果たしてしまったという理由であるにもかかわらず、Dはそこに一切触れずに貸すと言っている。通常の場合であれば、こうした理由の場合、正当な理由とみなさず、借金の申し出を断る口実に使うが、借金のみならずギャンブルにおいても寛容な傾向がある。

一方、利子は関係ない、という発言は、本人の「利子など要求するのはみっともない」という考えの表れと思われる。用意ができた時点で返してくれ、というセリフについても、「金でごちゃごちゃ言うのはみっともない」という「男らしさ」の心理が働いていると考えられる。

## (2) 貸した経験を語り合う

このテーマを扱ったセッションでは、参加者の語りを有効活用している。この場合は借金をめぐる体験をそれぞれ語ってもらい、要点をホワイトボードに列挙し、共通する項目の整理をした。その過程において参加者はこのテーマを自分のこととして理解し、問題の本質に気づいていく。

「貸してそのまんま。2～3万円ばかり。3年くらい前。昔の同僚。返す、って言ったので、もうええわ、って言うたんやけどね」

「同じ会社に勤めてて、2～3人にお金貸して、なんぼ催促しても返してくれない。できた時に返してもらったらいい、と言うて貸したんやけど困った。本人も気まずいやろけど、僕も話しぶり。まだ一年くらい前のことで、金額は2万円とか3千円とかいろいろ。たぶん持ってても返してくれない。お金貸した時点でモノ言わなくなったし。もう付き合えない」

「女性やね。一度に2～3万円ずつ、3年くらいで合計百万円ほどとられた。ちやほやするので、えらいモテるなあとと思ってたら、支払いがある、電気代がない、もう銀行閉まってるとか言って。一度も返してくれない。こっちが困ってる時は知らん顔。約束した返済日には、手料理の差し入れなどを持って現れるので、強く返済を迫ることができなかった。次第に、借金のみならず、友人と称する人達を次々に連れてきて、その人達を連れて旅行に行こうと誘われ、その費用も金額自分が持たされた。今、思えば、最初の時にきちんと断ればよかったと思う。自分が甘かった」

「親にはお金の貸し借りはいけない、お金のルーズな人は信用してはいけない、とずっと言われてた。20年くらい前やけど、ずっと親交のあった人だったので、10万円貸してくれと言われ、こちらも楽ではなかったが貸した。やはり返済日になっても返してくれず、どんどん連絡をしてくる間隔が空いて、そのう

ち連絡が途切れた。もし今会っても、もう2度と関り合いたくない。信頼していたのでショックだった」

(2005年12月22日 R3-6 嗜癡①金品)

借金をする際に用いられやすい口実にはどんなものがあるかを出しあうと、病気、入院、家族の不幸、家賃の滞納、電気代の未納、などが挙がった。次に、それらを順に見ていくと、次第にそれぞれがそれほど強い説得力をもたないものであると気づき始める。例えば入院に対しては、「今どきの病院であればすぐに支払えないからといって、寒空に放り出すようなことはないはず」、という発言や、「酒を呑んでいて金がない、貸してくれというのはおかしい」など、相手が本当に困っているかどうかを見極めるべき、という理性的な意見が出てくる。

こうして現実起きたことの中から、借金とは何か、借金行為がもたらすもの、奪うもの、など、相互の経験の共有を通して物事の本質をさがしていく作業は、参加者にも興味深いのかさまざまな意見が活発に交される。このようなディスカッションを経てロールプレイの枠組みをつくっていくと、借金についての認識が改まるだけでなく、思考が深まり、問題理解を早めることができるようになる。

### (3) 再体験による「気づき」

更生施設には抑うつ状態による通院・治療中の人もめずらしくない。こうしたケースでは就労に直結させるよりも、まず社会的スキルの改善を通じて孤独感や抑うつ状態の軽減をはかる必要がある。

次は精神的に問題をかかえるUさんの語りである。

「病院とかに入院しているときに、生活保護費を2万円ほどもらうんですが、他の入院患者たちが借りにくる。もらった日に全部とられることもある。返してくれと言えない。自分たちが使ったら、また借りに来る。貸しても返せと言えなくてそのままに。それでそこにいるのがいやになって、自己退院した。言えるようにならないかな。あげたつもりにするとか」

(2005年07月26日 R2-6 嗜癡①金品)

彼はたび重なる借金の求めに応じつづけたことで生活破綻した。病院に入院することがあったが、お金が入るたびに、同室の患者にたかられた。名目は「貸してくれ」というものであり、金額的にはひとりにつき毎回数千円とそれほど多くはないが、誰ひとりとして返してくれることはなく、無一文になってしまう。彼は一度もそれを断ることができず、結局、無断で退院した。

Uさんは重度のアルコール依存症者で、現在、専門病院や自助グループなどに通い、治療中である。極度な気弱は生育歴における母親への恐怖心から生じたと思われる。「あれは虐待であった」と自ら語っており、現在50歳を越えているが、今でも母親と年恰好の似た女性を道端で見かけると、迂回する。そうした気弱さから周囲の人間に金を奪い取られたり、強制労働をさせられた結果、最終的には野宿をして人を避ける生活へと入っていった。病院での借金の求めにどうすればよかったかという問いに対しては、「断るべきだったんでしょね。でも、それができたらね、苦労はないんですけど」と答えた。

こうした場合、自分がなかなか断れないことを認識するために実際にロールプレイを行い、うまく断れない瞬間を再体験する。これにより、借金を申し入れる側、申し込まれる側の立場を両方経験し、断る側のほうがずっと心理的な負担が大きいことが実感できる。

次に、なぜ断れないのかについていっしょに考えていく。「やはり仲間だから」「こちらを信頼しているから言ってくるのだから」「助けてあげたいという気持ち」などの発言が出てくるが、最終的には貸した金が戻ってくることはほとんどない。その結果、「人間関係は壊れた」、という結論に達し、借金という問題が2者間に発生した場合、貸しても貸さなくても人間関係は壊れるもの、という認識を確認することになる。

「意思を明確にできない」「頼みを断りきれない」といった社会的スキルの不足は、周囲との軋轢や葛藤

を生み、孤立につながり、抑うつ状態を引き起こしがちである。その結果、自分のことを否定的に評価し、人前に出たり、他者の前で話すことを不安に思い、劣等感を強めていく。その結果、対人関係を回避することで対人接触が減るため、社会的スキルを実践的に学ぶ機会を逸して、社会的スキル不足はさらに悪化するという悪循環に陥る（相川 [1992]）。

#### (4) 断り方のバリエーションをもつ

こうした借金の申し出という事態に遭遇した場合、具体的にどんな方法で対処すればよいかを考えていく。ロールプレイの最中に出た発言や感情を踏まえて意見を出し合うようにすると、次のような意見が上がった。

「困ったなあ、と本音を言う」

「自分も持ってないわ、ほら（と、ポケットの中身を見せる）」

「これ貸したら、わし明日食べられへん、という」

「1万円貸してと言われたら、やったつもりで1000円か2000円渡す」

「日延べ（明日にして、など）はあかん。また繰り返す」

この中で、「困ったなあ」という言葉は意外と出しにくいという。先述したが、概して入所者たちは、「金というものはごちゃごちゃいわずにサッサと出すことが美德であり、男らしいことだ」、という男性的な原理で動きがちなため、正直な感情や困惑、自らの現状を相手に伝えることで、相手の心情に訴える方法を学んでおく必要がある。

また、所持金の持ち合わせがないことを証明するというのは、本当に持っていない場合はよいが、いくらか持っている場合、この方法は通用しない。そこで、「これ貸したら、わし明日食べられへん」などのように、持っているがこれを貸すことで自分が窮状に陥る、など貸せない理由を具体的に相手に提示することにより、同じ依頼を繰り返し受けられることを避けられる。

その他、相手が本当に困っているのかどうかを見極めることとして、「本当に困っているなら、なんで酒を呑んでいるのか」と指摘する、飲み屋では貸さない、などがあり、断っているのに相手がしつこい場合は思い切って席を立つ、という意見もあった。

こうして、借金をめぐるさまざまな側面をつぶさに見ていくことで、借金行為の問題性を知ることができる。そして、現実的に借金の求めに遭遇した場合は、容易にそれに応じることなく、自らを守ることを、各自の目標とすることができる。

### 3. 遊興と孤立

入所者たちは、社会的に排除されているという自認が絆となって「連帯感」「仲間意識」も強い。だが、時にそうした親密感が、仲間をそこへとどめておきたいという感情につながり、足をひっぱられてしまうことがある。更生施設における社会復帰、つまり「人生のやり直し」にはむしろ孤立状態から始めることが効果的ではないだろうか。

#### (1) 仲間の悪影響

入所者にはギャンブル依存、とりわけパチンコにのめり込む人が多く、これがきっかけで「仲間」を持つことが少なくない。パチンコから離れるためには、そうした仲間と距離をとることが不可欠となるが、仲間の誘いに対してははっきり断れない自分に思い悩む姿がよく見られる。

「パチンコ依存から抜け出したいが、仲間に誘われると断りきれない。以前いた施設もそれがきっか

けになって退所することになった。この施設にもかつての仲間がいるので、困っている」

(2005年08月09日 嗜癖②酒・ギャンブル)

Sさんは、入所当時、こう語っていた。そこで、ギャンブル仲間の誘いをしっかりと拒否することを学ばないと同じことを繰り返す、と忠告したが、本人はうつ傾向が強いことを理由に、他施設への転出を強く希望したため、学習は中断した。

また、アルコール依存症のUさんは、自己コントロールをテーマとするセッションのロールプレイで、酒の誘いに対して断る練習をしたが、なかなかうまくNOを言うことができなかった。じっと考えていた彼は、ワークの終わりにこう言った。

「自分の場合は、酒の誘いがあった時、それを隠そうとするより、アルコール依存症で治療中だ、呑んだら死ぬと正直に言ったほうがよいのかもしれない」

(2005年08月09日 嗜癖②酒・ギャンブル)

これは、ロールプレイによってようやく自分の問題点を再確認することができた例だろう。強引な相手には自分の現在状況を明らかにしてでも相手をあきらめさせることが大切である。

## (2) 遊興型の入所者

入所者の考え方や行動の観察から、彼らは大きく2つのタイプに分かれると考えられる。

遊び仲間づくりに精を出し、退寮後も遊興を中心とした関係性構築に熱心な、日雇い労働出身者に多い「遊興型」と、かたくなに他者との接触を絶って孤立した生き方を選ぶ「孤立型」の2タイプである。

いずれの場合も円満な社会復帰が困難であるが、遊興型は慣れ親しんだ文化・習慣への執着が強いことから、現状肯定の気持ちが強く、自分の行動パターンや考え方を変える必要性を強く感じていないため、社会に戻ったとしても根本的な生き方は変わらない場合が多い。

新しい入所者への説明会として、SSTの「体験クラス」を月に一度設けており、レギュラーコースへの参加者を募る。そこで遊興型から頻出する感想としては、「よくわからない」「難しい」「よいと思うが、自分には必要ない」「こういうことに興味がない」「苦痛である」など、否定的な意見が多数を占める。

次の会話は、もと漁師で、その後は日雇い労働者をつづけていたHさんが、SSTに初めて参加した時のやりとりである。

藤木 ではただいまより、SSTを始めたいと思います。今日はHさんが初参加ですね。自己紹介をいただけますか？

H (大声で) よろしくお願ひします！

藤木 もう少し何かお話していただけませんか？

H いや、これ以上、何もありません。

\*ここからウォーミングアップに入る。これまでの「怖かった経験」について語り合う。

藤木 Hさんはどうですか？

H わし、何もありません(話さない)。

藤木 ではまた何か浮かんだら、来週にでもお願ひしますね。

H (黙っている)

(2004年11月09日 R1-3 医療 病院との上手なつきあい方)

Hさんは、当初SSTに対して好意的であった。施設内の親しい人に声をかけ、参加者を増やしたことはよ

かったが、ワークの最中に気に入らないことがあり、怒って部屋を出て行った。Hさんはそれきり参加を中断したが、彼に誘われて参加した仲間までその日を境に参加しなくなった。人に言われて、つきあいで、といった感覚での参加にはこうした問題が起こりやすい。

次はワーク中に出た異議だが、職員とのコミュニケーション不足が読み取れる。プログラム内容にこうした皮肉や注文を出すことで、ふだん職員に対して言いたいことをここで吐き出そう、という意味が感じられる。

Y      こんなことするより、就労や求人に関する情報がまず必要なやないですか？

藤木    それも大事なことです。では、そういう情報の提供も実施していただくよう、施設に要望しておきましょう。で、これも就労や地域生活に大事な「コミュニケーション練習」ですから、大切なことです。だからそれとは分けて考えていただいていいでしょうか。

Y      そやな。わかった。職員に頼みごとをする時にもコミュニケーションが要るしな。貸与金、貸してもらいたい時とか。

I      おい、これ練習したら、金貸してくれんのかい（一同笑い）。

（2004年10月12日 開講式 自己紹介とオリエンテーション）

このように、日雇いを中心として生活してきた遊興型入所者は、おおむね向上心が弱く、学習意欲に乏しい。群れやすい分横並びの気持ちが強く、プログラム参加にも消極的である。自己開示も苦手で、権威や体制への反発心が強いことから、ワークに参加しても頑なな態度を崩そうとしない人が少なくない。

そうした姿勢がグループ全体の妨げになることもあるため、事前アセスメントによる参加の可否の検討が必要と思われる。

### (3) 孤立型の入所者

一方、孤立型は、孤立している分、単独で参加してくる。体験クラスのあとで感想を求めた時、「自分はこれまで負けつづけてきたが、これからは勝ちたい」「ほんまに変わるんか。変れるんやったら参加する」など、自己変革を求めてひとりで申し込んでくることが多い。

さまざまな課題をかかえながらも、SSTの意義や有用性を納得しさえすれば熱心に取り組む傾向があり、最後まで参加しつづけるケースが多い。その意味では、社会復帰に対する意欲が高く、SSTのターゲットは孤立型入所者が中心にならざるをえない。

40歳代後半の入所者Qさん<sup>10)</sup>は、孤立型入所者の典型といえる。彼はSST参加を申し出たものの、事前のアセスメントにおいては長時間にわたり次のように不満を語った。

お金がないと就職活動もままならない。稼ぐためには、現実問題として日雇いしかない。それで日雇い（労働）に行くが、身体はガタガタになる。仕事も途切れると、次の給料日まで食いつなげないような人間を会社は雇わない。仕事で無茶苦茶使われ、腰も曲がって真っ直ぐ歩けない状態の人間は、はねられる（＝辞めさせられる）。そんな繰り返しで、こっち（施設P）に来た。日雇い仕事でも職人として自分の腕で喰っている人間と、僕らのように使い回しで、普通の人間なら潰れてしまうところに日替わりで呼ばれる人間が要るわけだ。これは、町工場でも一緒に、「人が居付かないポジション」というのがある。また、そういう（使い捨てをされる）人間を確保するために、この不況というのが非常に都合がいい。そんな仕事でも欲しがっている人がいるから。ですから、この不況を経営者側が有難いと考えている空気をもぞもぞと感じ取れ、とつても哀しいなと思っている。そういう労働環境がきっちり整備され、体が駄目になるような仕事をきっちり行政が罰してくれれば、経営者側もそれでは（働く）人間が集まってくれないから、労働者環境を変えてくるはず。人殺しも起こっている。「言うこと聞かん」言うて、

グサッて刺されている。れっきとした愛りん（地区）の職安の監察を貰っている出入り業者がそういうことをしている。その（＝事件の）後は、出入り禁止になるが。（その業者は）暴力団ときっちりとしたつながりがある。そのことを（職安の）センターの職員とかが知らないわけでは決して無い。「被害者意識や」と思われるかもしれないが、本当にこの世の中には被害者がいるのだ。（SSTは）これはこれで、ものすごく意味があることだと思う。僕の立場から言わせてもらえば、社会の方も受け入れるスキルをトレーニングしてくれたらという気はある。普通の生活をしたい、重労働から逃れたいということに、スキルが必要なこと自体が腹立たしい。

（2005年03月27日 アセスメントでの発言を筆者が要約）

彼の語りには、社会の矛盾、構造と階層、ヒエラルキー、社会的弱者の存在など、野宿者のかかえる怒りや不満が込められている。Qさんは語彙も豊富で弁もたつが、同様の意見を持ちつつも、その表明の機会なくひっそりと生きている人々は決して少なくないと思われる。その意味で、これはひとりの入所者の言葉ではなく、同じ立場の人を代表する意見と考えられる。

また、Qさんはつづいて野宿仲間から受けた仕打ち、嫌がらせについても声を荒げて語った。気色ばんだ表情が、当時の悔しい思いを伝えていた。

ホームレスの情けなさだが、住む場所が無いので、買ったばかりのサムソナイトのスーツケースを捨てられてしまった。（パソコン教室で版書を）取っていたノートも。チェーンを付けて、ホームレスの人が置き場所としている場所に置いていた。だが、そこにはきっちりとテント構えて、電気も引いて、電気洗濯機も置いているホームレスの団がおり、その人等が『お前達のような浮浪者にそこに荷物置かれるのは腹立たしい』と言って清掃業者に電話をした。（その一団は）清掃業者とツーカー（の中）。電話一本で（荷物置き場に）来て、鎖でつないである物（＝荷物）も全部ちぎって持って行ってしまう。何千人分の生活用具だということ、ゴミではないと見てわかるものをゴミとして持って行く。そのため、着るものから、歯磨きセットやコップまで失ってしまった人もいる。僕はそういうのだけは小さいかばんに入れて別に自分で持っているので、歯磨きセットだけ残ったが（他は廃棄された）。

この話からは、野宿生活者がおかれている境遇、とりわけ家がないことにより類出する荷物の保管場所をめぐるトラブルや、冷徹な野宿者同士のいさかいがよく見える。野宿生活における過酷さの中でも、同じ立場の人からの仕打ちは最も耐え難いものとしてその後の社会観に影響し、強い人間不信の核となりうるのだろう。

#### （4）孤立から連帯へ

孤立型入所者Qさんは、SST参加によってその後どのような変化を見せたのだろうか。

施設入所当時、彼はほとんど他の入所者と話しをせず、夜間は一階の休憩室でひとり読書をするなどして人を避けて過ごしていた。つねにタオルを首に巻いており、首から離れた時も手に持つなど、片時もタオルを離さなかった。視線恐怖も強く、人と目を合わせることはほとんどないうえ、次のような攻撃的な言葉を頻繁に発していた。

「人との挨拶を強要されることは腹立たしい」

「（ロールプレイに対して）これはいわゆるコントやな。演技したらええんか、かなわんな」

「世間の人間が社会的スキルを習ったらええんや。こっちが習わなあかんのが情けない」

「悪いのはパチンコ屋。あいつらが警察と結託して悪さをしとる」

（2005年08月09日 嗜癖 酒・ギャンブル）

だが、そんな悪態をつく一方、Qさんは参加まもない時期からワークの開始前に必ずやってきて、ひとり黙々と椅子やテーブルを移動させて準備をする姿が見られた。時に手伝おうとする人がいると、声をかけ合ったり、あれこれ指示を出して場を仕切ることもあった。次第に、笑顔や冗談が見られ始め、こうした取り組みに対する理解や肯定、共感の言葉を練習中に口にするようになった。

「こんな場がもっとあったら」

「SSTのしらじらしさに耐えられるようにしたい」

「ここでは俺たちを受け入れてくれるが、世間はそうではない。こんな恥ずかしいバカバカしい練習に耐えることができないなら、僕はずっと社会に戻れない」

(2005年08月09日 嗜癖 酒・ギャンブル)

3カ月も経つと、Qさんは、すっかりSSTのムードメーカー的存在、模範生となった。時にSSTに嫌気が差した人が突然部屋を出ていってしまうなどのトラブルがあっても、彼はタイミングよく場をフォローするなどの役回りがかってでた。こうした協調的態度は、彼がアセスメント時に見せた激しい反発からは想像できないことだった。

その後、Qさんはある事情によって施設を中途退所し、残念ながら、全回修了することができなかったが、同様の変化を見せる人は他の参加者にも少なくない。慣れるにしたがって発語が増え、協調的な態度をとり始め、参加当初と比べ、とくに表情ががらりと変る。そして10回のプログラムを終えるころにはどこかに就職が決まる、というパターンである。こうした変化が意味することとして、人間や社会への不信は、人間との関り合いやコミュニケーションに対する切望の裏返しと言えるのかもしれない。

### Ⅲ. 更生施設入所者の社会復帰

以上、更生施設における2期のSST（社会生活技能訓練）実践の過程から見えてきた、更生施設入所者がかかえもつ問題の内容と課題について述べた。

プログラムに参加した入所者の共通点として、これまでの失敗や挫折の積み重ねから、全体的に発想がネガティブで、自己効力感に乏しく、一面的に物事をとらえてしまいがちであること。多くは根が真面目だが、要領が悪く、正直に答えすぎることが場でマイナスに働くという側面がある。

また、これまでの環境、慣習などにより、金銭の貸し借りを肯定的にとらえていたり、いわゆる「男らしさ」にしばられがちであったり、仲間同士の親密感やいわゆる「くされ縁」的な関係を断ち切りがたいものと考えて、新しい生き方になかなか足を踏み出せないという人も少なくない。一方、社会や人間に対する強い不信感をいだき、就労はおろか、施設でも孤立し、自ら社会復帰の意欲を持つことが困難な人もいる。

こうした彼らの共通点や、それぞれにかかえもつ事情の帰結として、頭でわかっているも行動が伴わなかったり、自分の行動を省みることができにくい状況、すなわち社会的スキルの欠如と見られる状況を招くため、何度就労しても対人関係につまずき、再び簡単に失業してしまうのである。これが更生施設における入所者と社会復帰を隔てる大きな壁になっているといえる。

しかし、施設など集団生活の場において、グループによる学習という機会を提供することによって、集団の中で再び人と交わる楽しさを発見したり、多角的に物を考えることを学んだり、自らが執着してきた過去の経験や、それに伴う否定的な考え方を見直すきっかけを得ることができれば、それが社会復帰への意欲と行動につながっていくものと期待できる。ここにSSTが果たしえる役割があるのではないか。

SSTの練習中に、「嫌いな言葉は」と問うと、「希望」という答えが返ってきたことがある。この言葉を言った人は40歳代後半。以前はトビ職をしており、腕の良い職人だった。結局、彼はSSTに数回参加したあと、

「自分のやり方でやっていきたい」と現れなくなった。担当者のお話では、その後、就労先を探す意欲もなく、未だ停滞中とのことだった。転換のヒントをつかめるまでもう少し参加を継続してほしいと思っ

ている。入所者の中には社会に失望し、仕事を探す気にもならず、目標も持てぬまま刹那的に施設で日々を費やす人が少なくない。こうした状態はやがて、ささいなことで暴力沙汰を起こしたり、日先の遊興や一時しのぎの快楽行為へと走り、無断退所や逆恨みへとつながり、施設入所がかえって悪い結果を生むこともある。

また、体格の立派な男性でも、「今は人と目を合わせるのが怖い」と口にする入所者はめずらしくない。視線恐怖が見受けられる場合、無理に目を合わさず、鼻や口元、それも難しければ、胸元を見るようアドバイスするが、こうした繊細さや気の弱さも入所者の特徴だろう。

対人関係は、これまでの本人の考え方や生活形態、習慣、経済状況、嗜好をダイレクトに反映している。総じて施設入所者たちが同室の人と会話をせず、他者との係わり合いを極力避ける傾向があるのも、おの

の対人関係における苦い経験があるからだろう。しかし、どこかでそんな生き方に転換を図らなければこれまでと同様の暮らししか望めない。人はひとりでは生きていけないこと、まずは自分から心を開かねば道は開けないことを知り、どんな交友関係を築き、いかなる生活を手に入れたいのかを決定する必要がある。

一方、体験クラスのあとで、「こんな会議（のようなもの）に今日初めて出た。大勢でテーブルを囲んで、自分の意見を言える。こんな経験したことなかった」、という感嘆ともつかない感想を述べた人がいた。彼はこれまでそうした場にまったく無縁な環境の中で生きてきたのだろう。人が一生に得る経験は、生きてきた過程・環境によって大きな差異があることを改めて思い知らされた。

入所者にとってSSTは、多くの場合、未体験の異文化に他ならない。参加への抵抗感は相当に強く、参加募集そのものが大きな課題となるだろう。SSTを実施する施設の長や職員はその認識をしっかりとっておく必要がある。その意味で、広報は、わかりやすいことのみならず、共感が得られやすい、敷居が高いと感じさせない、などの配慮と工夫が必要である。とりわけ、ふだん接触度の高い担当職員からの熱意ある恒常的な働きかけが不可欠である。そのためには、まずSSTを施設全体の取り組みとしてしっかり位置づけること、そして施設全体で協力体制をとれるしくみを構築しなければ、参加者の確保、維持継続は望めないだろう。

## おわりに

ここまで、「Ⅰ. 社会復帰支援としてのSST」では、現在の実践の内容と経過、入所者がかかえる問題を概観した。「Ⅱ. 入所者の課題とその克服」では、更生入所者に特有と考えられる問題を挙げ、それらへの対処として、「状況に適した答え方をする」「借金を断る」「遊興と孤立」の3つに大別し、具体例を挙げながらその内容を見ていった。

そこでは質問に臨機応変に答えたり、相手を安心させる答え方を学ぶことの必要性を確認した。また、借金を断るという課題においては、ロールプレイによって断れない自分を自覚し、貸した経験から学ぶ、断り方のバリエーションを持つ、などが重要であることを見てきた。そして入所者には遊興型と孤立型の2タイプがあり、孤立型のほうが社会復帰への意欲が高いことなどを述べた。

「Ⅲ. 更生施設入所者の社会復帰」では以上のまとめとして、更生施設が今後とりくむべきは、対人関係能力に重点をおいた社会復帰プログラムであり、これまでの生き方や考え方を見直し、新しい対人関係を構築するための意欲を促す機会とすべきであることを明らかにした。また、最初の一步を促すための参加意欲の喚起と、施設全体による働きかけの重要性についても述べた。

人生の中途において、何らかの要因により心理的なダメージを受け、社会生活が破綻し、転落した社会的遭難者が社会復帰するための必須の要件は、「希望」に他ならない。社会復帰は自ら意志を持たねば成しえないことであり、SSTにうまく適応する人、そうでない人もおり、これによってすべての入所者が社会復帰

できるとは考えにくい。その意味で、SSTは社会復帰を目的にしたさまざまな道筋の中のひとつにすぎないが、意義ある支援のひとつであると考え。さまざまな体験の中で強くその人に刻まれた負の遺産を克服することは容易ではないが、しかし、社会復帰の第一歩はどんな場合もここからしか始まらない。

### 【注】

- 1) 藤木美奈子 [2005a] 「社会的遭難者のための社会復帰プログラム開発～SST（社会生活技能訓練）の実践から～」（創造都市研究科修士論文）。
- 2) これについては、藤木美奈子 [2005b] 「更生施設入所者のための社会復帰プログラムの可能性～アセスメント結果を中心として～」『共生社会研究』参照のこと。
- 3) 本稿で取り上げる更生施設Pは、国内で野宿者を最も多くかかえる都市として名高い大阪市にある。定員は単身男性のみの140名。もともとは現行の社会保障制度から抜け落ちた日雇い労働者の集積地である「あいりん地区」に暮らす人々の最低限の生活を援助していく施設としての役目を担って30年前に設置された。
- 4) Social Skills Training（社会生活技能訓練）。SSTは、ウォルピ（Wolpe, J）が始めた自己主張訓練が原型。学校等で集団に溶け込めない、引きこもりの強い青年を対象に行われたもの。1970年代に入ってリバーマン（Lieberman, R）が注意障害や認知障害がある分裂病などの慢性精神障害者でも学習しやすいように工夫し体系化して、1988年にわが国でも伝えられて、本格普及した。
- 5) 社会的スキルは、英語のsocial skillsの訳語。『心理学事典』（平凡社 [1957]）では「社会的技能」と出ている。おそらくこれが日本で取り上げた最も古い例と思われる（相川 [2000]）。社会的スキルを「過程」としてとらえる「社会的スキルの生起課程モデル」（相川ら [1993]）によると、「社会的スキルとは、対人場面において、個人が相手の反応を解釈し、それに応じて対人目標と対人反応を決定し、感情を統制したうえで対人反応を実行するまでの循環的な過程」ということになる。
- 6) Ladd, G. W., & Mize, J. [1983] 'A cognitive-social learning model of social skill training' "Psychological Review", 90, pp.127-157.
- 7) アファメーション内容：「私は全回、参加します。私は開始5分前に来ることができます。私は積極的に練習に参加します。私は正しい姿勢で人と向き合います。私は楽しくはっきりと話します。私は人の話をよく聞きます。私は素直に学びます。私は考え方を変えることができます。私はここで学んだことを実際に活かします。私は人を褒めることが好きです。」
- 8) SSTの約束：「いつでも練習から抜けられる、いやなときは「パス」できる、人のよいところをほめましょう、他の人を助けましょう、質問はいつでもどうぞ、席をはずすときは断ってから」。この他、「5つのコミュニケーション」もある。
- 9) ADLとは「Activities of Daily Living」の略で、食事、排泄、着脱衣、入浴、移動、寝起きなど、日常の生活を送るために必要な基本動作すべてを指す。高齢者の身体活動能力や障害の程度をはかるための重要な指標となっている。
- 10) Qさん、48歳、ドヤ（簡易宿泊所）経験2年、路上生活経験2年。両親の学歴は2人とも小学校卒で、漁師と農家を営んでいたが、自身が28歳、38歳の時にそれぞれ他界。弟については「ノーコメント」。母親との関係では、「自分は怠け者、親からしつけを受けるに値しない、まともな人間ではない」と語る。反面、「関りを持たはず」「関り合いは悪かった」と親との間になんらか問題があったことを示唆する。長い肉体労働経験に懲りており、違う分野の仕事に就くことを強く望んでいる。この社会の悪は行政のせいであると主張し、野宿生活において遭遇した排除や盗難により受けた屈辱的な経験が、社会や世間への強い不信となっている。施設内においても他者との会話を極力避ける。仕事自体が自分を幸せにすることはないと断言。自分の能力は低いと感じているが、学習意欲は高く、語彙力や表現力は的確。知能はかなり高いと思われる。

## 【参考文献】

- 相川 充 [1992] 「大学生における孤独感と自尊心、シャイネス、社会的スキルとの関係」『宮崎大学教育学部紀要（教育科学）』、72、pp.15-26。
- 相川 充他 [1993] 「社会的スキルという概念について—社会的スキルの生起過程モデルの提唱」『宮崎大学教育学部紀要、社会科学』、74、pp.1-16。
- 相川 充 [2000] 『人づきあいの技術—社会的スキルの心理学—』（セレクション社会心理学20）、サイエンス社。
- アリス・ミラー [1996] 『才能ある子のドラマ』、新曜社。
- 菊地章夫 [1988] 『思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル』、川島書店。
- 玄田有史・小杉礼子 [2005] 『子どもがニートになったなら』、日本放送出版協会。
- 斉藤 環 [2001] 「ひきこもりと社会性」『現代のエスプリ』、403、pp.66-67、至文堂。
- 斉藤 環 [1998] 『社会的ひきこもり—終わらない思春期』、PHP新書。
- 下中邦彦 [1957] 『心理学事典』、平凡社。
- 大坊郁夫他編著 [1992] 『社会の中の人間理解—社会心理学への招待』、ナカニシヤ出版。
- なだいなだ他編著 [1998] 『依存症（アディクション）』、中央法規出版株式会社。
- 藤岡淳子 [2001] 『非行少年の加害と被害—非行心理臨床の現場から』、誠信書房。
- 藤岡淳子他編著 [2000] 「反社会的人格障害の処遇と治療」『臨床心理学大系 第19巻 人格障害の心理療法』、pp.140-156、金子書房。
- 藤木美奈子 [2005a] 「社会的遭難者のための社会復帰プログラム開発～SST（社会生活技能訓練）の実践から～」〔修士論文〕。
- 藤木美奈子 [2005b] 「更生施設入所者のための社会復帰プログラムの可能性～アセスメント結果を中心として～」〔共生社会研究〕。
- 東大生活技能訓練研究会（代表 宮内 勝） [1995] 『わかりやすい生活技能訓練』、金剛出版。
- 三浦 展 [2005] 『下流社会 新たな階層集団の出現』、光文社新書。
- 山本憲一 [2004] 「自立支援センターからソーシャルインクルージョンへ」『大阪市社会福祉研究』第27号。
- 渡辺弥生 [1996] 『ソーシャル・スキル・トレーニング』、日本文化科学社。
- Bierman, K. L., & Furman, W. [1984] 'The effects of social skills training and peer involvement on the social adjustment of preadolescents', "Child Development", 55, pp.151-162.
- Ladd, G. W., & Mize, J. [1983] 'A cognitive-social learning model of social skill training', "Psychological Review", 90, pp.127-157.
- Wehman, P. H. [1975] 'Toward a social skills curriculum for developmentally disabled clients in vocational settings', "Rehabilitation Literature", 36, pp.342-348.